

(始良郡溝辺町大字麓字山神)

**位置と環境**

鹿児島空港がある十三塚原台地の西端部に近く、海拔256～258mの平坦な台地上にある。付近は空港敷地や道路部分などを除くと広大な茶畑地帯になる。九州自動車道溝辺インターチェンジの西北側に高速自動車道を主体部とした東西約300m・南北約400mの範囲に遺跡が埋蔵するとみられる。古老の話では、昭和初期まで山神祠が畑地の一角にあったという。

**調査の経緯**

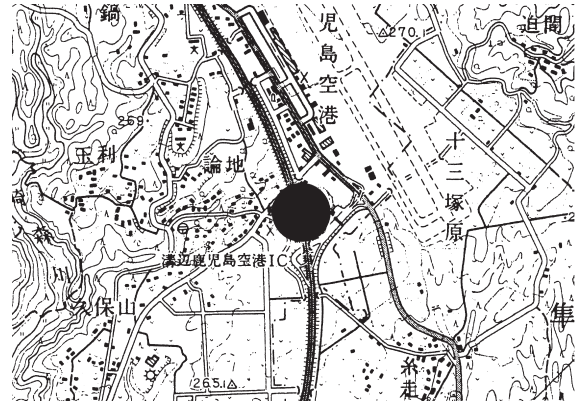
九州縦貫自動車道の建設に伴って県教育委員会が昭和49年6月から昭和50年3月まで10か月の間、広さ6,900m<sup>2</sup>を発掘調査した。

**遺構と遺物**

山神遺跡の概要を新しい時代順に述べる。

**[大正3年の火山灰]** まず終戦前の溝辺町論地と隼人町糸走間の旧道が姿を現した。この旧道は山神と枳場との小字境でもあり、若干くぼんだ溝の中に大正3年の火山灰が薄く堆積していた。桜島大爆発当時は十三塚原で10cm以上積もったらしいが、発掘調査時に残存していたのは、ようやく火山灰だと確認できる程度であった。

**[奈良・平安時代]** 本遺跡の中心となるのは奈良・平安時代の遺構と遺物である。掘立柱建物跡3棟と多くの溝状遺構を検出した。地表よりの深さ約40cmで確認された溝状遺構は、第II層（アカホヤ火山



第1図 山神遺跡の位置

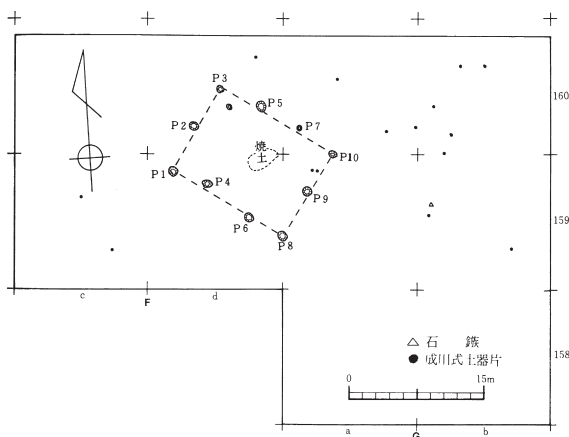
灰) を掘り込んだ幅60～100cm・深さ15～20cmの断面形が深皿状のもので、その埋土(溝に埋まっていた土)は8世紀末の霧島火山の噴出物(第I層:黒ニガ)であった。数本の溝状遺構が並行したり互いに直交して方形もしくは矩形の土地区画を形作っていた。土地区画の方位はN22～25°Eで、自然地形にもとづく方位とみられる。

溝状遺構およびその周辺から土師器・須恵器の小片が数多く出土し、その中に多くの墨書土器片が含まれていた。とくに第3図に示した「奠」と書かれた完形品と「廣」と読める墨書は達筆であり、大隅国衙の官人と何らかの関連があるとみられる。

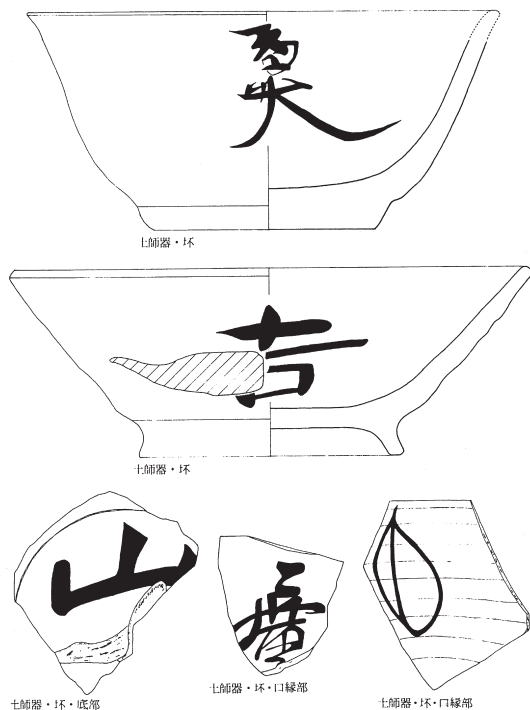
**[焼土と建物遺構]** 土師器片・須恵器片の散布を伴う溝状遺構の面から下に掘り進むと、径80～100cmの灰を主体とし、炭の小片も混ざっている焼土が出現し、その焼土を取り巻くように多くの柱穴群が検出された。焼土を18か所検出したが、柱穴との組み合わせで掘立柱の建物遺構として形を把握できたのは3組で、1号・2号・3号建物跡とした。1号建物跡は、間口4.6m・奥行2.3m。2号建物跡は間口4m・奥行2.6m。3号建物跡は間口4.8m・奥行3.6mであった。1号・3号建物跡は3間×2間の柱間で、間口:奥行の比率は4:3、2号建物跡は2間×2間の柱間で、間口:奥行の比率は3:2(あるいは8:5)と考えられる。

建物遺構に伴う遺物は周辺に成川式土器片の散布がみられるだけで時期の決め手とはしにくい、その年代は古墳時代末期～奈良時代とみられる。

**[縄文式土器および石器]** 第III層(アカホヤ)から



第2図 山神遺跡の3号建物遺構



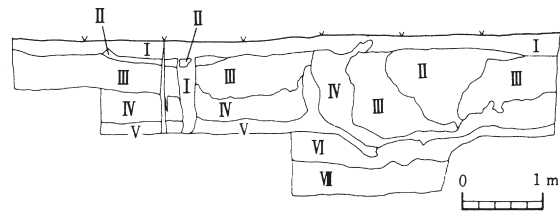
第3図 山神遺跡出土の墨書土器

1.凹線文土器 2.岩崎下層式土器 3.市来式土器 4.貝殻条痕文土器 5.捺糸文土器などの小片が出土したが、完形を復元できるものはなかった。凹線文土器と岩崎下層式土器が胎土に雲母を含んでいたのと捺糸文土器の内面に輪積みの手法がみられたのが特色である。

石器には石匙3・すり石2・凹み石2・石鏃(磨製1・打製24)があり、ほとんどが第II層から出土した。土器が縄文中期から後期のものであり、それに対応するものであるとみられる。石鏃の用材は珪岩(10)・黒曜石(9)・チャート(3)・玄武岩(2)・千枚岩(磨製)などである。

[上層の横転] 近時、大地震の際、軟弱な地盤では液状化現象が起こることが常識となったが、発掘調査時に土層断面で液状化現象の痕跡が各地で確認されている。山神遺跡の場合、極小局地的な断層を示す土層横転現象が10か所で見られた。

はじめ第II層(アカホヤ)を掘り込んだような円形の黒い落ち込みらしきものが見られ、遺構と考え慎重に対処したが、落ち込みは掘り下げても容易に底は出なかった。そのうちに壁面で層位が90度横転していることに気付き、以後は平面的にも理解で



第4図 山神遺跡の土層横転断面図

きるようになった。十三塚原の台地は、始良カルデラの北壁に連なる地域であり、火山地帯の局地的小規模断層が随所に発生したと考えられる。

特徴

山神遺跡の第I層(黒ニガ)は、続日本紀卷三十九にある延暦7年(788)の曾乃峯(霧島山)噴火時の火山灰と見られ、記録と出土遺物の年代が一致する例だと考えられる。

完形品2点をはじめ小破片15点の墨書土器が出土したが、大隅国・薩摩国における文字資料土器(墨書土器や刻書土器)の出土分布は地方官衙や駅路と関係が深い。山神遺跡の場合は「溝辺=横川=栗野=菱刈=大口」に連なる文字資料出土地域に該当し、このルートは大隅国と肥後国との駅路に結びつく。十三塚原台地の各遺跡では古代道路遺構は未確認であるが、天承2年(1132)石清水文書に「往古大路宮坂麓」とあることから古代の駅路は宮坂麓にある石跡神社から十三塚原に上り北上したものとみられる。本遺跡の墨書土器は駅路の旅の安全祈願と結びつく可能性が大きい。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会 1977「山神遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財報告書』7

(平田信芳)